

PHD LETTER 14

発行 財団法人PHD協会
編集人 草地 賢一
〒650 神戸市中央区元町通5-2-3
甲南サンシティ元町ビル
電話 (078) 351-4892
郵便振替 神戸1-29688
財団法人ピー・エイチ・ディー協会
印刷所 マルニ出版印刷 定価100円

1985年4月1日発行



日本人にとってのPHD運動 ～効率の論理を超えて～

インドネシア、バリ島にて

理事長
今井 鎮雄

アフリカの難民の状況が刻々と報告されるにつれて、現代における地球規模の悲劇がクローズアップされ、我々の胸を打たずにはおかない。新聞社をはじめ多くの公的機関が行っている募金や毛布を送る運動なども功を奏し、皆の善意が今日を生きることに苦しんでいる人々に届けられるのは嬉しいことである。

この食糧危機は、単に旱魃といった自然現象によってのみ引き起こされたものではなく、地表に残ったわずかな木を切り伐ってしまったり、政治的理由による国内の争いなどの要因が複合的に加わっているということである。この事実は、地球上に起こる人類の悲劇である飢餓も、結局は人間が自分あるいは自分達を中心に生きることのみ夢中で、「ともに生きる」という人間の本質的な生き方についてはまだまだ無知である、ということを示しているのではないだろうか。

歴史的にみても、かつて開発途上国では早急に工業化を推し進める政策がとられたが、その成果はその国の人々の教育の程度にかかっていることを思いしらされたのである。

私達は工業先進国あるいは教育の進んだ国の一つとして、国も経済界も世界的な視野に立ち、第三世界の人々に対する分ちあいの姿勢が大切であることに気付いているが、もしこの姿勢が西欧近代社会を支えた効率の論理に基くものなら、真の解決は遠いものであろう。

役に立つもの、効果のあるもののみを追い求めてきた近代社会の論理では、弱い者、年老いた者は哀れみ以外に受ける余地はないのである。これからの地球社会が「ともに生きる社会」を目指すなら、互いの持てるものをそれぞれに応じて捧げ合う心が必要であろう。10%を捧げるということは、量ではなく、捧げる質が問われるのである。

PHDがアジアの青年と生活をともにしながら何を学びあえ、何を与えられるかを考えることは、その意味で歴史的課題なのである。



PHD運動とは

PHD運動とは1962年(昭和37年)より約20年間、ネパール、東南アジアを中心とした開発途上国で医療活動に従事された岩村昇博士の提唱による国際社会福祉運動です。これまで自分のためにだけ使っていた時間、技能、財などの10パーセントをさきあげて、平和づくり(Peace)健康づくり(Health)を担う人材をつくる(Human Development)運動を世界中にひろめることを目的として、1981年(昭和56年)からはじまりました。

ようこそ！ 第3期生 — フィリピン・ネパール・タイから —

第3期PHD研修生が、3月末に来日します。ネパール、フィリピンに今回はタイが加わり、3ヶ国となりました。PHD研修は、技術のみではなく、“こころ”を学ぶ研修でもあります。アジアのことを考えて下さる人々とふれあい、また姿勢から、研修生自身、自国の自分よりも困った人々の何かお手伝いをしよう、と励まされる場でもあるわけです。反対に、私たちも、考え方や感じ方の違う研修生から学ぶことはたくさんあると思います。多くの方が、研修生とお出合い下さることを期待いたします。また、研修に関して、ご助言がございましたら、協会までご連絡をお願い申し上げます。

- ①氏名 ②国籍 ③年齢(生年月日) ④現在の職業 ⑤送り出し機関 ⑥研修内容 ⑦現地での活動及び研修の抱負



- ① Mr Nilam Kumar Gauchan
ニールン クマール ガウチャン
- ② ネパール
 - ③ 28才 (1956年8月2日生)
 - ④ 雑貨屋経営
 - ⑤ ネパール結核予防協会
 - ⑥ 大豆の栽培・収穫・加工・健康教育

⑦ 私は、ネパール結核予防協会のボランティアとして、首都カトマンズから西に約200km離れたジャンジャという地域で活動しています。ネパールには数多くの民族、言葉があります。結核の予防、撲滅には、地域の人々の自発的な参加と努力が必要とされています。私は、地域の人々に、地域の言葉で、BCG接種の大切さを説き、環境衛生の指導や結核の早期発見と報告、また治療後の経過観察を行うなど、民衆自身による結核対策を進めています。ところが人々の栄養摂取状態は悪く、蛋白質不足からBCGをうっても効果がなく、かからなくてもいい病気になるか、死ななくてもいい病気で死ぬ人々が多くなります。私は、栄養摂取の向上を通じ、地域の健康増進に役立て、特に乳幼児の死亡率を少しでも下げたいと思います。大豆加工を学び、地域の健康教育を進めたいです。



- ① Miss Shobhana Shrestha
ショバナ シュレスタ
- ② ネパール
 - ③ 22才 (1962年11月2日生)
 - ④ マザーズ・クラブ職員
 - ⑤ マザーズ・クラブ
 - ⑥ 紳士服、婦人服、子ども服の製作

⑦ マザーズ・クラブは、ネパール婦人の、特に経済的に貧しい立場にある女性の自立を手助けする民間ボランティア団体です。私は、カトマンズの一面、ドーカールという貧民区にある支部で洋服や編物の共同作業場を運営しています。私のまわりでは、貧困であるために十分な栄養もとれず、保健衛生状態も悪く、また教育の機会も得ることができない等の環境の中で貧困が更に

助長されている、といった現実があります。そうした状況を改善するため、主として経済生活の向上に焦点をあて、現金収入につながる仕事を準備し、技術指導を行っています。私は、日本で修得する洋裁技術をマザーズ・クラブの人々や、地域の婦人に指導し、マザーズ・クラブ自体の技術向上と、婦人の現金収入増加を図り、地域福祉のお手伝いをしたいと思います。



- ① Mr Preecha Muanchan
プリーチャ ムアンチャン
- ② タイ
 - ③ 21才 (1963年7月15日生)
 - ④ 農業教師
 - ⑤ タイ・カレン・バプテスト会議
 - ⑥ 稲作(陸稲・水稲)・野菜・果樹・土壌保護

⑦ タイ・カレン・バプテスト会議は、タイ北部の高地民族、カレン族を対象に、キリスト教の他、住民の生活向上のための農業振興、教育の普及に力を注いでいます。私もカレン族ですが、タイ・カレン・バプテスト会議の経営するムシキエ地区の学校で、農業を指導しています。カレンの多くの村では森を切り開いて田畑を作っていますが、農業技術の不熟さや自然条件等から農業生産性も低く、人々は苦しい生活を強いられています。近年、土壌の侵食、政府の植林政策等のために、生活はより貧しくなっています。私は、限られた土地を上手に使うアドバイスや、農業技術指導を地域の人々にしています。私は日本で、村づくりのヒントを得、ムシキエ地区の人々の農業生産品の充実を図ることを通じ、経済基盤を安定させ、生活改善に役立てたいと思います。



- ① Mr Franklin V. Fermin
フランクリン フェーミン
- ② フィリピン
 - ③ 46才
 - ④ 国際農村復興協会(IIRR)職員
 - ⑤ 国際農村復興協会(IIRR)
 - ⑥ 淡水魚(主としてテラピア)の養殖

⑦ 私は、国際農村復興協会職員として勤務しています。国際農村復興協会は、様々な有効な農村復興計画を通じて、世界各地の草の根の人々が、自らの努力によって生活の改善をもたらしけるように協力、指導を行う機関です。主な事業として、計画実施のための調査、指導者の養成、国際的協力を行っています。私は、テラピア(鯛の一種)については基礎的な知識と経験を持っていますが、日本での深い研修を通じ養殖技術の改良、普及をすすめる、地域住民の生活向上に役立てたいと思います。

※なお、フランクリンさんは、PHD協会と国際農村復興協会との提携プログラムの一環として、3ヶ月間の短期研修として来日します。

会員の参加と共同を！

— 1985年度開始にあたって —

PHD協会が設立されて今年度で4年目を迎えました。少しづつその働きが整備され組織化が進められています。

研修事業がこの協会の中心の仕事ですが今年度取り組んでいかねばならない点は次のようなものと考えています。

- ① 研修生からPHD運動者へ
過去3年間の研修生は現在10名。これらの人々が祖国でPHD運動を組織し村の中に定着していくための支援強化。
- ② 研修生派遣国の拡大
現在までの派遣国はネパール(6名)、フィリピン(4名)の二カ国。これを徐々に増加させる。今年度はタイを加える。
- ③ 研修内容の整備
研修の基本方針を再確認し内容の深化を図る。その為に多く

の人から意見を求め研修分野も拡大する。啓発事業は我々の存在を決定する大切な仕事です。今迄にも増して多くの人々にPHD運動を伝え賛同を得なければなりません。

- ① 県内を中心にしつつ更に他県にまで積極的にPHD運動を紹介していく。
 - ② PHD運動を担う人々の育成を図る。特に中高生等の若い世代に学習と体験の機会を作る。
 - ③ 研修生を活用し具体的にPHD事業を通してその運動理解者を得る。そして地域の中にPHDの拠点を作りあげたい。
- 募金事業は研修、啓発事業の母です。試験研究法人認可の第二目目として情熱をもって基本財産造成、人材育成資金の募金に取り組んでいきます。
- これらをすべてスタッフのみで実現することは不可能です。会員制度が発足して3年目、多くの会員が参加して始めて達成できるものです。参加と共同の年になりますようご理解ご支援をお願いします。

がんばっています

— 帰国した研修生を訪ねて —

日本から物も道具も持ち込まないフォローアップ

PHD運動提唱者・理事 岩村 昇

今回、年末から年始にかけて、ネパールに里帰りさせていただきました。この私的な旅に合流して、PHDフォローアップの方達がネパールにお出かけ下さいました。ネパールPHD女性研修生サヒさんとラダさんがお世話になった岩下さん、柳田さん、藤田さん、満村さんです。

実はこのフォローアップの為に、かねて皆様からお寄せ頂いた道具や物の類を別送荷物としてあらかじめ発送してあったのですが、遂にこの方たちのネパール滞在中には、届きませんでした。後からわかったことですが、途中のバンコックでストライキがあってあらゆる荷物が積み残されたというのです。

そのために、フォローアップの素晴らしい成果がありました。岩下さんと柳田さんは、サヒさんの自宅に、藤田さんと満村さんはラダさんの自宅にそれぞれ泊り込んでその家族及び仲間の人達と、ネパールにある道具と材料を持ち寄り、創意工夫で新しい作品を生み出したのです。編物、織物、手工芸品等です。

そうして、その作品展を行いました。「ネパールの手もとにある材料と道具で、こんな素晴らしい作品が出来る。」作品は飛ぶように売れました。サヒさんが奉仕をしているスラムの婦人達も、ラダさんが奉仕をして居る土地を持たない農家の婦人達も、「日本から物や道具を送ってもらわなくても、自分達で手づくり出来、作品を売って、そのお金で子供に栄養のある物を食べさせてやれる。」と大喜びでした。

今後PHDフォローアップは「出来るだけ、日本から物や道具を持ち込まないで、現地にある物や道具を活かして。」と考えるようになりました。

たしかな歩みを目指して

総主事 草地 賢一

岩村理事、岩下先生がネパールからの女性研修生についてご報告くださっていますのでこの報告は男性8人(ネパール4人、フィリピン4人)とまとめてさせていただきます。

＊ビスタさん、アディカリさん＊

ネパール家族計画協会の職員としてずっと村に住み、村々を巡回しています。二人とも本職以外に、自分達の村を中心としてPHD研修で学んだ養鶏を展開しています。帰国後一年半を経たビスタさんは、既に100羽以上のわたりを村人とともに、更に増やしたいと頑張っています。アディカリさんは、昨年12月2日に帰国、大切に持ち帰った種卵250個を解卵器で、200個から16羽、村の地鶏に抱かされた50個から15羽、計31羽が孵化したとのことです。早速、村の人々にわけあげ、今大切大切に養っています。

＊アマッティアさん＊

ビスタさんと同様、帰国後一年半、今大変多忙に結核予防協会の職員として、カトマンズ近郊の村々を訪問し、結核予防の仕事に奮闘しています。その為に、自分の時間が作り出せず、目下のところ学んだ養鶏の技術が活用しにくい状況です。彼は、出来るだけ近い将来、村人の支援を得て、村の中に「農」の実践をしたいと希望しています。直接養鶏にはたずさわり得ていないのですが、村々の巡回訪問の時に、野菜栽培やその他の農業技術によって本職の他に村人の相談にものっているとのことです。

▷サンバさん

帰国後半年、滞日中に決心し華の都カトマンズから約1000km

生かされている日本での経験

2期生サヒさんホストファミリー 岩下 富子



「マザーズクラブで指導するサヒさん(左端)」

9ヶ月ぶりのサヒさんとの再会。お母さんの手作りネパール料理。カトマンズのスラム街など、感動と驚きの連続でした。マザーズクラブの事務所を訪ね、新しいデザインのセーターやベストを目にした途端、私の胸はジーンときたのです。それは、サヒさんが寸暇も惜しんで熱中した日本での研修成果が、はっきりと実っていたからです。

マザーズクラブは、会員86名、リーダー8名、サヒさんはその支部長としてがんばっています。今回は、同行の柳田先生が知恵をしばり、現地のはぎれや紙を利用してブローチや花などの手芸品を指導されました。私は南瓜や山芋などの料理を担当し、皆さんと喜び合える展示会をもつことができました。

毎日、次期研修生のショバナさんとリーダー達と接しているうちに、ネパールやマザーズクラブのことが少しわかってきました。でも、このクラブの目的 — 女性の自立 — のためには、彼女達も私達も、もっと考え、学ぶ必要があるのではないのでしょうか。PHDによってつながれた、このすばらしい交流の輪をますます広げ、解決への道を求めてゆきたいと念じてやみません。

西北のダイレクにある奥さんの里の村に移住しました。僕は彼の村を訪ねるべく歩いて片道2泊3日の旅に出たのですが、恥かしいことに足を痛めて一歩手前の村までしか行けませんでした。往復の途中サンバさんの願いを聞きました。第一は、出来るだけ早くダイレクで自立すること。まず自分の土地からの収穫を得て、家族のくいぶちを得る。第二は、現金収入を確保するために村の中に店を開く検討をする。それが実現したあかつきに、ダイレクから徒歩で2日の距離にあるジャルコットの村(ネパール最貧の村のひとつ)を含めて、保健の仕事を展開したいとのことでした。

＊パニサレスさん、リトさん＊

フィリピン、マニラ郊外にあるサンアントニオとタグンパイの村を訪ねました。パニサレスさんは、相変わらず確実にテラピアの養殖に取り組み、今では近隣に出かけて技術指導巡りしています。地主からの信頼厚く、安定したようすで安心しました。一方リトさんは、昨年27日にのぼる台風の影響で、遂に村を出てマニラにいます。何とかして村で再出発するために、新婚の奥さんと思案中でした。まだ仕事を探している段階で、インフレのすかさずの中で苦しんでいました。

＊ウィリーさん、レネさん＊

帰国後一ヶ月半、100%のインフレで大変苦しんでいます。ウィリーさんは、何とか養豚から出発したい、レネさんは果樹をと考えているようですが、いずれも前途わいしい感じです。4人の人々とキャスメン先生(フィリピン大学地域保健計画ディレクター)と話し合い、何とか特に3人の人々の再出発が検討になるよう緊急の検討を始めることにしました。今回訪ねたすべてのひとびとから、日本のなつかしいみなまにくれぐれもよろしくとのことでした。

日本の青年に期待するもの

アリフィン・ベイ

アジアへの複眼思考



1925年、インドネシア・スマトラ生まれ。1954年～57年、ニューヨーク、国連放送局勤務。1961年、米国、ジョージタウン大学大学院国際政治科博士課程修了。1961年～67年、インドネシア・ヘラルド編集長。1967年～在日インドネシア大使館参事官・筑波大学客員教授。1984年、インドネシア、プンハツ大学副学長を経て、ナショナル大学日本研究センター所長。著書に「インドネシアのころろ」（めこん）「アジアが日本に忠告する」（秀英書房）など。

「20世紀は大西洋時代、21世紀は太平洋時代」と評されている。その意味は、日本の経済的繁栄に加え、かつて植民地であったアジアの国々が政治・経済的地位を向上させ種々な民族文化に市民権を求めてきた中で、最早、現代を主導してきたヨーロッパ文明が絶対的価値基準として機能しなくなり時代に至ったという事だ。

私は、文化とは優れて精神的なものであり、人々の生活・行動の価値基準と考える。その背景には長い歴史の積み重ねがあり、人々はその中で自らを位置づけてきた。或る民族は自らの手で文化を創り、また或る民族は模倣する事によって各々の文化を築いてきたのだ。思うに、日本という国は種々な文化という電波を受信してきたのみの、言わば「文化の終着駅」であった。太平洋時代に於て、日本の役割とは新たな電波を発信する事ではなからうか。その電波とは、歴史を深く洞察し、種々な文化、価値体系を理解できる青年を育成していく努力であると思う。そうした青年の育成と交流を進める中で、相互の理解を深め平和に貢献していくことが、アジアの国々の中で唯一、政治的に安定し経済的繁栄を誇る日本の役割であろうと私は考える。

アジアの国々との連携による多国籍教育機関の設立、留学生の交換拡大を通じて太平洋時代を担うにふさわしい若者が日本で、アジアで育っていくことを今から楽しみにしている。

1984年12月8日神戸での日本語による講演の要旨を神戸YMCA総合研究所の御厚意により掲載させていただきました。文責はPHD協会編集部にあります。

本紹介

「アジアの開発と民衆」

—日本のかわりを見直す—
 鹿谷三喜男/アンセルモ・マタイス編
 YMCA同盟出版

戦後、独立を達成したアジア諸国は、先進国の「援助」をテコに数々の「開発計画」を実施してきた。然し、40年を経た今日、貧困からの解放の切札であったはずの「開発」は貧富の格差をますます拡大し、民衆の多くは貧困と壬政に苦しんでいるのが実情である。そして一方には、その「開発」を「援助」してきた先進国の繁栄がある。それは、あたかも先進国のみが豊かな富を享受する特権を与えられているかのようである。

こうした矛盾に満ちた現実、草の根民衆の声なき声を、同時に生きる人間、そして日本人としての様に受け止めるべきであろうか。本書は、「アジアに於ける開発と正義」をテーマにこうした問題を日本のかかわりにおいて検証し、我々の進むべき道を探ろうとする試みであり、「共に生きる社会」の実現に針路を与えてくれるものである。

世界の草の根運動紹介 サルボダヤ運動

Sarvodaya Sharamadana 良き人間をめぐる -スリランカ-

サルボダヤ、シュラマダーナ運動は、1958年、当時高校教師であったA.T.アリヤラトネ氏が生徒と共に貧しい村で奉仕活動を行った事に始まる。以来28年、仏教を根本思想とした民衆自身の自立運動として発展し、今日ではスリランカの6000に及ぶ農村で種々な開発計画を実施する迄に成長した。他の第三世界はもとより先進国においても高い評価を得、多くの人々がこの運動を学ぶためにスリランカを訪れている。

サルボダヤとは「人間の目覚め」を呼び起こす業を、シュラマダーナとは「労働の分かち合い」を意味している。この運動の目指すところは、勿論四世紀に及ぶ植民地支配によって荒廃した人間・社会の再興にあるのだが、単純な経済的近代化ではない。すなわち、民衆一人一人の心に、伝統的仏教に基づき調和のとれた全人間的覚醒をもたらし、そうした人々の集団的社会参加を通じて現実的な開発に取り組む事である。他の国々では、対立概念としてのみ把握されていた「宗教と開発」が、この運動においては両者が見事に統一され、人間の宗教的欲求が開発努力への参加を通じて具現化されている。



この事は、従来、開発の対象としてしか見られていなかった民衆を、開発を担う主体に如何にして転化していくかという課題に、宗教的・伝道的価値意識を尊重する事の重要性を示してくる。或いは単純な近代化論及び技術に基づいた開発は、民衆の内発的な動機づけによる成功し得ない限り決して参加し得ない事を教えてくれるものである。他のアジア諸国で、多くの人が貧困の中で無気力に生きている一方で、このサルボダヤ運動が何故にこの様な発展を遂げ、民衆の間に根付いていったかの答は、ひとえに「人間的覚醒」と「自主的な開発プログラムの実施」にあるのではないだろうか。

スリランカを実際に訪ねて驚いた事は、村々で実施される種々な計画、すなわち教育・家族計画・保健衛生・農業振興等が非常にバランスよく、しかも村人がよく組織され各々の活動に参加していることであった。このことは、その根本理念において調和のとれた人間性の開発・発展をめざすサルボダヤ運動の、具体的開発プログラム実施に於ける必然的な政策であろう。キャンディ近郊のサルボダヤ・キャンプで会った少女の言葉……「良い人間、そして良い社会の一員になりたい」……に、私はスリランカの確かな明日を見る思いがした。

今日、スリランカに於て「陰の政府」と迄評されるサルボダヤ集団。それは、とりも直さず、この運動に参加する民衆自身の存在とエネルギーが無視し得ない迄に成長してきたことの証左であろう。（主事 大濱 裕）

アジヤのことは アジヤのことは アジヤのことは アジヤのことは

いくらですか？

〈英語〉	How much ? ハウ マッチ
〈タイ語〉	เท่าไหร่ ? タオライ
〈ピリピーノ語〉	Magkano ? マグカーノ
〈ネパール語〉	कोति पैसा ? カティ バイサ ?

ON THE WAY

私の感じたアジア

去る1月5日から2月9日まで37日間にわたるアジア調査旅行に出張しました。私にとっては4年振りのアジアでした。国際協力しかも草の根の国際交流とは何か、今東南アジアの諸国に何が起きどんなダイナミズムが存在しているのかを手探りで感じる37日間でした。従って今回の報告は客観性に欠けかつ一方的な「私の感じたアジア」で終始せざるを得ません。その意味では私のアジア志向はまさに「on the way」(途中)でしかないことを認識させられた旅でした。今回と次号と2回に分けてで報告申し上げます。

ネパールの首都カトマンズからYS11で約1時間40分飛び更にビーチクラフトに乗り換えて20分の場所にスルケットという村があります。第二期研修生のサンバさんと長野で彼が会った光岡さん(彼は現在サンバさんを助けて村に入っています。)と三人でここから二泊三日歩いてサンバさんの村ダイレクまで片道約200kmの徒歩旅行に出発したのは1月9日の朝でした。最大斜度70度近い急な坂を登り降りしながら考えたこと。大人も子供もカーストの高い人も低い人もすべて平等にただひたすら細い岩道を歩く。人々の大きな呼吸の音がすれ違えばはっきりと聞えてくる。この山々の体験を通して人間の平等ということ深く考えさせられました。

山の人々は本当に貧しい。けれども自然と共存し心は素晴らしく暖かい。私がとくに失った素材を確かに保持している。この人々にして開発とか豊かさとか近代化はどんな意味があるのだろう。まず今よりも一歩でよい、進歩があればよい。具体的には一年に何回かしか食べられないにわたりをせめて月1回でも10日に1回でも食べられるようになること、一年中きたきりの破れた衣服がせめてあと二着か三着増やすことができれば少くとも今よりハッピーになれるのだろうか。草の根の人々にとっての豊かさを我々異邦人がどのように考えられるのかが問われた山の旅でした。

カトマンズから約3時間半でスリランカに着きます。眼下にインド大陸を見ながらマンゴレーンのコロンボに着いたのは1月16日の午後でした。首都コロンボのダウンタウンに向かわず私にすぐに迎えの車で農村地帯を走り夕方、キャンディの町に入りました。途中何回か車を停めて村の中のバザールや学校の写真を



ネパールの女傭

スリランカの村にて

撮りながらつい数時間まえまで居たネパールの村と比較しておりました。農家の造り、人々の暮らし振りは一見ただでスリランカの方が数段豊かに思えました。豊かさを比較する時、ともすれば現在の自分の水準をものさしにしがちですが、私のこの時の体験は違った角度から見えたように思います。と同時に比較することから自分や相手を理解する糸口が見つかるということも学んだように思いました。

約1週間のスリランカ滞在中ほとんど毎日のようにシンハラ人とタミール人の抗争が伝えられていました。1月19日の夜世界一致祈禱週集會に出ました。これは世界のプロテスタントとカトリックの人々が宗派を超えて一つになることを祈る集會です。そこで使われた言葉は英語でしたが何故かそれはシンハラ語にもタミール語にも通訳されませんでした。永い英国支配の中で英語が広く使われることは知っていましたが村に入った経験では必ずしも草の根の人々に英語は通用しませんでした。今スリランカの教会の人々が一番必死に折っていることはシンハラとタミールの一致だと聞きました。草の根の人々に伝わる言葉がもし英語から通訳されるならばそれは今のスリランカに大きなシンボルを与えることになるのではないかと。つまり支配者の言葉である英語が実はこの対立、抗争を超えて解放の言葉として使われる。但しいつも草の根の人々の言葉で伝えられる通訳をつけて。しかもたとえ少数者であってもすべて平等に通訳がつけられる。

このように私の感想を聞いたコロンボの友人は「なるほど外国の方から指摘されてみると僕達が見落している点が少し分った。」と言ってくれました。

アジアの大きな多様性は私のように島国で育った人間にはなかなか理解できません。その意味で国際交流がそして特に草の根のそれが我々日本人にとって大きな教育になるのだということとをこの会話を通じて教えられた思いでした。次回でビルマ、タイ、フィリピンで学んだことをご報告します。(草地 賢一)

草の根交差点 (その八)

〈ネパールの民族〉

ネパールは、世界の屋根と言われる七千米級のヒマラヤの氷峰と、インドに接する熱帯のタイ平野にはさまれた、東西に細長い小さな王国です。何世紀にもわたって北から南から移住してきた人々々が、その高度差に加えて交通不便な山間山の地形ゆえに、大変複雑な民族に分れていったようです。登山隊の高所ポーターとして世界に名を馳せているチベット系のシェルパ族、世界一強いと言われるグルカ兵を生み出しているグルン族など、主都カトマンズに古くから文化の花を咲かせて来たネパール族、今の王家と同じアーリアン系の人々など、多くの民族がネパール国民として暮らしています。宗教も多様で、ラマ教を信じるチベット系の人々や、アーリアン系のヒンズー教徒たち、その他の宗教なども影響しあって独特な宗教の形が見られます。人々は大変信心深く、朝早く捧げ物を持ってヒンズーの祠にお語りする事から一日が始まるようです。三日一度はどこかでお祭りがあつた、といわれる程、信仰が生活に根づいています。ヒンズー教には、生まれながらにして職業によるカースト制度

があつて、こまかく分れたカースト名が族名であり、姓のようにして使われます。その控はきびしく、他のカーストの人々との結婚もむづかしく、行事も別といった具合です。もともと支配階級に都合よく作られたものでしょうが、他所のものから見れば、大変非能率的に思えます。かごに乗る人かつぐ人、その又わらじを作る人的な均衡を保っている面もあるのでしょう。



カーストの他にもルーツの異なる民族に分れていて、単一民族の日本人にはなかなか理解しにくい事です。しかし、この身分制度も法律によって少しづつ崩れつつあるようですし、心ある人々々は、ネパールの自主を目指して立ち上っています。皆さんもネパールの事をよく学んで、一度この美しい国を訪れてごらんになりませんか。現代文明に押し流されてきた大切な物のあることを思い出されることでしょう。



“肌で知るアジア”

見て見ぬふりをする訳にはいかない

本校の生徒会がPHD運動のことを知ったのは、昨年5月、第30回創立記念日に、岩村先生からアジアについての講演をお聞きしてからのことです。

映画と講演を通して、実際にアジアでの岩村先生のご活躍を、拝見しました。そして、日本で生活している私達には考えられないような、アジアの人々の生活を、初めて知りました。

例えば、自分の生活がかかっている仕事をしている時でも、困っている人があれば、仕事を放り出してでも助けてあげるといふこと。これを聞いて、“本当にアジアの人は、すばらしいなあ”と感じました。“貧しくても、人間としてやるべきことは、きちんとやっているノ”そんな人々を見て見ぬふりをする訳にはいかないと思いました。

“すねかじり”にも出来た古切手あつめ

ところが、なにしろ私達は親のスネをかじっている身ですので金銭的にも限りがあります。そこで、PHD協会に「アジアの貧しい人たちのために、私達でもできることはないかノ」と相談し古切手を集めることにしました。さっそく執行部で、どうすればたくさんの切手が集まるか話し合っ、プリントに古切手を集める目的を載せ、全校生徒に配布しました。玄関の所に箱を設けて、呼びかけの文を大きく書きました。最初は、本当に集まるのかどうか、とても不安でしたが、みんな沢山の切手を箱に入れてくれました。

サンバさんいわく「ニホンゴハ、ムズカシイ」

PHD協会の人たちと話を進めていくうちに、ネパールからの研修生サンバさんに、直接ネパールのお話を聞いてみることにしました。学校で、スライドを見ながら、ネパールのことや、ネパール語のあいさつを教えていただきました。

サンバさんいわく「ニホンゴハ、ムズカシイデス。」

私達いわく「ネパール語は、むずかしいです。」などと冗談も交えながら、終始リラックスして、この交流会を終わり、早速、ネパール語で別れのあいさつをして、サンバさんを送りました。

その後、サンバさんとPHD協会の方々と、日曜日を利用して、空き缶回収に出かけたり、事務所へ手伝い(?)をしに行ったりしています。

“共に生きている世界の仲間”

ローマでの平和アピール

松中みどり

昨年、パチカンで開かれた、国際青年年世界平和シンポジウムの日本代表として、15カ国、20人の若者と平和への提言を全世界に訴えた。堪能な英語を生かして、PHD運動に参加。尼崎市在住。KDD勤務。

今、この原稿を書こうとペンを取り上げて、私はローマで会った若者の顔を思い浮かべました。

英語が苦手だからディスカッションが心配だと言っていた韓国のソフィア、いつも余裕たっぷり落ちて着ているシンガポールのミス・リー、リーダーシップのある明るいアメリカ代表レラーニ、愉快なスペイン代表ホセ、まだ高校生の可愛いフランス代表

幅広い実践活動

そして現在、毎月1回、アジアの人から話を聞いたり、課題を発表し合ったりして、若い人達で、“アジアについての勉強会”を重ねています。アジアについて、もっといろいろな事を知りたいなあと思っていましたので、喜んで参加しています。

以上が、これまでのPHD運動への私達の活動です。

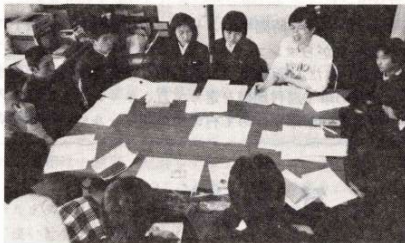
私達は、PHD運動の他に、北鈴蘭台にある恵泉寮という所を訪ねています。さまざまな事情があって、親と一緒に生活することのできない子ども達と、月に一回、ゲームをしたり、飯盒すいさんに行ったりしています。子ども達は、本当に素直な子ばかりで、私達を「お兄ちゃん、お姉ちゃん」と慕ってくれます。

PHD運動も、恵泉寮の訪問も、まだ始めたばかりですが、これからも、ますますこれらの運動に力を注ぎたいと思っています。そして、これらの運動が、いつまでも続いてほしいと思います。“共に生きるために”少しでも協力していきたいので。

2月5日、数々のボランティア活動が認められ、神戸市教育委員会より「よいおこないをした児童生徒」として表彰されました。おめでとう。

中・高校生アジア学習会が始まっています

昨年12月のPHD研修生の送別会をきっかけに、中学・高校生が中心となりアジアの学習会が始まっています。月一回、PHD協会に集まり、アジアの人、日本人のアジア体験者の話をきき、また映画、スライド、資料などを使い自主的にすすめていきます。将来フィリピンへの修学旅行を予定しています。参加無料、集合日、各回のテーマなど詳しくは協会まで。中高生以外もOK。



なごやかな勉強風景

エマニュエル……。私達代表20名は、“世界平和実現のために何ができるか”をテーマにシンポジウムに参加したわけですが、ローマ法王の前での平和アピール等、貴重な体験をさせていただきました。しかし、何よりも得がたく、素晴らしいのは、同じ時代を生きている世界の若者が、文化・環境・風土等の違いをふまへ、またそれを超えて、語り合えたことなのです。

The Countries I knew by names, now I can remember by your faces. 「名前ではし知らなかった国を、今では、君達の顔を思い出しながら、より身近に感じる。」と、一人の代表は言いました。

共に生きるということ、共感するということが、これはPHDの根本的な精神であり、今回のシンポジウムでの私のアピールの基本でもありました。共に生きている仲間が、世界中にいるということ、それを実感として体得できたこと、シンポジウムに参加した一番の収穫はそこです。これからの活動の支えとなってくれる大きな励みと思っています。

PHD サウンド ③

各地のPHDグループ紹介

“サンガイ・ジュネ・コラギ”

みなさん、こんにちは。
私達は、下関で活動している、藤田、島村、中谷、中村、村木、伊藤、清水、満村の女性ばかり八人のサークルです。日頃は、藤田さんを窓口にして、送ってもらった切手の整理や、年に一度「ネパール展と手作り品バザール」と銘うって、私達の日頃の活動の紹介と、メンバーの手作り品や、ネパール、バンラデシュの農村婦人の手工芸品等の即売をしています。

この度、藤田、満村の二人がネパールに行き、昨年、PHDの研修生として来られていた、ボカラにあるラダさんのお宅に、ホームステイさせて頂きました。そこで彼女が、村の婦人、子どもに、ネパール語の読み書きと、編物を、毎晩自宅で教えておられる場に私達も参加させて頂き、生徒さんとの交流の中から、言葉は通じないながらも、お互いの中に流れている熱いものに触れることが出来ました。

ラダさんが、「10 勇を捧げる」PHDの精神を、ネパールで誠実に実践されている姿を、目のあたりにして、本当に感動しました。下関での私達の活動も、反省させられる思いでした。つたなくはありますが、ラダさんが頑張っている様子を、写真に納めて



村の婦人の見送りをうける前列右端ラダさん。花をもつ人の右満村さん、左藤田さん

きましたので、今年の「ネパール展」では、これらの写真展も行計画しております。

今後の活動の方向としては、ラダさんとの交流を続けていく中で、岩村先生に教わった“サンガイ・ジュネ・コラギ”（共に生きるために）の言葉の意味を噛みしめ、問いかけていきたいと思っています。（満村記）

連絡先 下関市上田中1丁目9-27

藤田 公美

PHD NEWS PHD ニュース PHD NEWS

□ アジア民芸品バザー開催

ソープチミスト神戸のご好意により、今年にはアジアの民芸品を中心にしたコーナーを出展します。入場費 500 円。

◎ 4月4日(木) 11:00～15:00 神戸ポートピアホテル地下催場

□ 理事長、神戸市民福祉功労賞受賞

去る2月7日、当協会今井理事長が市民福祉の向上発展に寄与したとして、昭和59年度神戸市民福祉功労賞を受賞しました。これを記念して2月26日、今井氏が関係している団体が集まって、「これからの社会福祉を考える」集いが盛大にもたれました。

□ フォローアップ計画に広島より支援

昨年11月に2期研修生3名(アディカリ、ウィリー、レネ)が広島への研修旅行の際、お世話になった広島西ロータリークラブが創立15周年を迎えられました。その記念事業として「ネパールにおけるPHDフォローアップ計画支援」が決定され、去る3月3日、理事長と総理事が出席し記念式典の中で支援目録を受領しました。具体的には養鶏による村づくり計画を実現することに用いられます。同クラブの高いご見識に感謝と敬意を表します。

□ 姫路からも協力の輪が

姫路の藤岡幸郎さん(終身維持会員)は宝石販売の仕事をしておられます。このビジネスを通じて藤岡さんはPHD運動の精神を多くのお客様に訴え続けておられます。昨年暮には17名の方からのご賛同を得て寄付金を捧げてください3月にも再び11名の方からのご厚志をお送りくださいました。お仕事を通じてのPHDご支援に感謝申し上げます。

□ 切手の流れは、こうなっています

日頃より使用済切手回収にご協力いただきありがとうございます。この切手は当協会から日本キリスト教海外医療協会にお届けし、アジアの国々の医療協力のために用いられています。次の

1985年度会費納入のお願い

皆様のご理解をいただき、会員数も増えてきており、感謝申し上げます。さて、新年度をむかえ、本年度分のご納入をお願い申し上げます。

PHD終身維持会員 一口 10万円

PHD会員 年額一口 5千円

PHD友の会会員 年額 500円以上任意の額

既に終身維持会員の方につきましては、会費としてお納めいただく必要はございません。また、友の会会費につきましては、お手元にお届けする会報等の費用に年間700円ほどかかっておりますので、ご配慮願えましたら幸いです。振込用紙に85年会費もしくは友の会会費とお書き添え願います。

ところで直接お送りいただいても結構です。

日本キリスト教海外医療協会
〒160 東京都新宿区西早稲田2-3-18-23
JOCOS関西事務所 〒541 大阪市東区高麗橋3-20

□ 人手不足の事務局です 月～土 9:00～17:00

簡単な事務処理、作業、翻訳、タイプ・ワープロ作業、PHDレター編集、各種行事企画・準備、研修生日本語学習応援など、アジアの話をしながら、ワイワイお手伝い願えませんか。

□ 研修生交流とホームステイお願い

研修生との交流を通して、アジアの現状や私たち日本人の生活について考えてみませんか?学校や地域にお招き下さい。また、家庭滞在をお引受け下さる方のご連絡をお待ちしています。

□ 基金寄託状況(会費・ご寄付)

1984年12月	¥ 6,378,465	597件
1985年1月	¥ 2,525,270	245件
2月	¥ 1,694,329	130件
計	¥ 10,598,064	972件

年末献金、クリスマス献金、会員ご紹介のお願いに多くの方のご協力を頂き、感謝申し上げます。上記のとおりご報告致します。

新規会員・寄付者 ご芳名は、
個人情報保護のため掲載しておりません。